

未来につなげる生き方を考える道徳教育の構想2
～教員養成における総合的な学習の時間の指導法を通して～

広中忠昭（麗澤大学）

1. 本テーマの意図について

総合的な学習の時間の目標は、「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」と学習過程の在り方と共に資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に分けて示している。解説ではこの「自己の生き方を考えていく」ことについて次の三つのことを上げている。

- ①（地域の）人や社会、自然との関わりにおいて、自らの生活や行動について考えていく。
- ②自分にとって学ぶことの意味や価値について考えていく。
- ③これら2つのことを生かしながら、自己の生き方につなげて考えていく。

このようにみると、総合的な学習の時間の目標を達成すること自体が道徳教育を適切に行うことになる。教員養成段階でこの3つを意識して単元を作成していくことは道徳教育を構想することを学生が体験的に理解することにつながり、今後学校現場に出たときに自ら全教育活動で進める道徳教育を構想する素地になると考え、本テーマを設定した。

2. 探究課題の設定

授業では学生一人一人が単元計画を完成させることをゴールとしている。スタートである探究課題を設定することは自らが「問い」をもつことである。「なぜ」を大切にし、思考を生み出すには、生徒にとって身近であり解決したいと思われる魅力ある学習材を吟味する必要がある。そのための演習としてウェビングマップを使い、学生自身が生活する地域の「人・もの・こと」に着目しながら学習材になりそうなものを探るようにした。さらに、その過程で生徒の立場に立ち、考えてみたい問題に対して何ができるか、どのようにすべきかを意識しながら、それを学ぶことの意味や価値を繰り返し考えるように促した。

昨年度の授業では学習指導要領に示された目標と内容の取り扱い、戦後のコアカリキュラムとの比較など理論中心の授業後に探究課題の設定を行ったが、身近な課題を決めることが難しく、学習テーマと学習材をつなぐことに苦労した。文科省の資料「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」には子供たちに課題を設定するには「体験活動を通して課題を設定し、問題意識を持つこと」とある。しかし、平成24年度の国立教育政策研究所が実施した学習指導要領実施状況調査では、「自分で課題を決めて、解決に取り組んでいる」の項目で小学4～6年生で「している」と答えた児童は24%程度である。今回の指導要領改定では「主体的な学び」を求めているが、自己の生き方を考える上で確かな「問い」を持つための課題設定のプロセスについて学生自身が体験的に理解することが出来た。

3. 単元の構想

学習テーマと学習材が明確になると、それを単なる活動の順序で並べるのではなく探究的なプロセスとしてそれを生かした学習のゴールを描く必要がある。そうすることで単元

の「ねらい」と育成を目指す資質・能力をつなげる事が容易になる。総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力は児童生徒の具体的な探究活動と結びついていなければならない。資質・能力を理解し、どう設定するかは学生が苦勞するところだ。そこで、今回は単元構想にあたって探究のプロセス及び活動のゴールと資質・能力が身に付いた姿を思い浮かべることができるように、ねらいの書き方を「～を通して（中心となる学習内容、活動）～を理解し、（知識及び技能）～について考えるとともに（思考力、判断力、表現力等）～ができるようにする。（学びに向かう力、人間性等）」とし具体事例を通して説明していった。

ここで探究のプロセスを大事にして学生が作成した資質・能力表の一部を紹介したい。

課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現
3Rへの気づき ごみ処理場見学 ・ごみ処理により温室効果ガスが発生し、温暖化とつながることを理解する ・ごみの削減に何が必要か考えている	3Rの基礎的理解 ・温室効果ガスが地球に与える影響について必要な情報を収集している ・得た知識や友達、地域の人の考えを大切にしている	3Rマスターになる ・集めた情報から課題を明らかにし、複数の情報を比較し、関連付けながら自分たちにできることを選択している	3Rの習慣化を図る ・活動を通して収集したものを回収センターへ運ぶ ・最終的にクラスでこれから何をしていくか考えている

4. 主体的に学習に取り組む態度

総合的な学習で学びに向かう力、人間性等につながる評価の観点が「主体的に学習に取り組む態度」である。ここには「地域の人々の考えなど多様な情報を生かしながら仲間と協働して課題解決に取り組む姿」や「異なる視点から考え、課題解決に向けて力を合わせて粘り強く取り組む姿」など自分自身に関する事と、他者や社会とのかかわりに関することの両方の視点が大切になる。地域の課題について自分事として考え、地域の一員として進んで行動し解決しようとする社会参画の態度を育成することは道徳科で育成を目指す「道徳的実践意欲と態度」に深くつながるものである。学生は単元を構想し計画する過程で道徳的問題を含む学習課題を設定し、それを学習材でつなぎ、探究のプロセスを通してねらいとする資質・能力を育成することについて考えていった。冒頭で総合的な学習の時間の目標を達成すること自体が道徳教育を適切に行うことになる」と述べたが、まさにそのことを学生自身が体験的に学ぶことになるのだ。

5. まとめ

道徳科は道徳教育の要である。しかし、道徳科は重要であるとわかっているにもかかわらず小中学校において週に1時間の授業に多くの時間と熱意を傾けることは容易ではない。道徳の教科化により教科書を中心教材として量的問題が落ちてきた今だからこそ、なおさら今後の道徳教育の展望に危機感を感じる、しかし、見方を変えると各教科には各教科ですすめる道徳教育がある。その意図や特質を理解し、道徳科の内容との関連を生かした指導を心がけることはどの教師にとっても取り組むべき課題である。そして、そのことが結果として子供たちに未来につながる生き方を育てていく上で大切であると考えている。

2022(令和4)年度春季大会

日本道德教育学会

第99回大会

大会テーマ

道德教育を科学する

2022(令和4)年6月26日(日)

東京家政大学

自由研究発表 第9分科会発表資料より(p112-113)